

1. 産業の再生・復興

4. 復興の原動力となった『南三陸復興市』

- 官民一体の観光地域づくりがスタートした矢先に東日本大震災が発生した。
- 地域事業者からの提案でいち早く「復興市」「語り部による学びのプログラム」が始まった。
- 「語り部による学びのプログラム」は、メディアでも紹介され、団体・個人等から視察の問い合わせが相次ぐようになった。

震災前の商工観光業

震災前の南三陸町は魚介類が中心の豊富な食を売りにした物産イベントが盛んで、年間の観光入込客数は100万人前後で推移していた。平成22(2010)年の観光入込調査では108万3,630人を数えた。町内の宿泊施設は40軒ほどで、小売業は平成21(2009)年時点ですべて257、従業者数は1,095人ほどの規模で推移していた。

また、水産加工業を中心とした製造業は平成22年時点で事業所数43、従業者数917人であり、中でも食品品製造が5割以上を占めていた。

このように、地域資源を活かし代々受け継いできた事業は多くあるものの、裾野の広い効果が期待できる「観光消費額による地域経済の活性」という視点では、資源を活用しきれていなかったのが当時の課題であった。

平成20(2008)年度、宮城県において初めて単独開催された大型観光客誘致事業「仙台・宮城デスティネーションキャンペーン」(※1)を機に、町の観光のこれからを地



震災前の五日町商店街

(※1) デスティネーションキャンペーン

北海道旅客鉄道(JR北海道)・東日本旅客鉄道(JR東日本)・東海旅客鉄道(JR東海)・西日本旅客鉄道(JR西日本)・四国旅客鉄道(JR四国)・九州旅客鉄道(JR九州)のJRグループ旅客6社と指定された自治体、企業、地域の観光事業者等が共同で実施する大型観光キャンペーンのこと。



「平成20年仙台・宮城デスティネーションキャンペーン」JR車中吊り広告

域全体で考えよう、町産業振興課(当時)が主催して開催したのが「南三陸ふるさと観光講座」(※2)だった。この講座には、町内の宿泊や観光施設関係者のみならず商店街や飲食店、地域住民、地元高校生も参加し、週に2回の開催で、地域の魅力を学びながら、町の観光のあるべき姿について自然した議論が交わされた。このような講座の開催や異業種間での議論が進む中で、この町の人や産物、自然環境等の地域資源を活かした観光を地域づくりの手段として活用していこうという気運が高まり、その取り組みの拠点組織として、それまでは任意団体(専属職員1名)だった観光協会を平成21年7月に法人化し、旅行業登録を行ったことに伴い、有資格者を含む人員も補充し組織強化を図った。

この頃、地域内でも先の観光講座をきっかけに、町の



震災前の伊里前商店街

(※2) 南三陸ふるさと観光講座

まちの魅力を見つめ直し、まずは私たち町民がこの町を好きになろう!という呼びかけのもと開催されたこの講座には、高校生から80代まで、実に1,000人も町民が参加し、その後の南三陸ならではの観光地域づくりのきっかけとなった取り組みの一つ。

隠れた魅力などもガイドする「ふるさと案内人」33人が誕生したり、観光で訪れたお客様にも地元の旬を味わってもらえるようにと町内の飲食店等が連携し、名物メニューを開発したりと、一つ一つの小さな取り組みが大きくなつていっていった。

また、地域資源を活用した滞在型観光の一つとして、関係団体や観光協会を中心に、全国各地からの教育旅行の誘致にも注力した。当時は入谷地区、戸倉地区を中心に、100軒を超える民泊受け入れ家庭の登録があり、農村漁村の暮らし体験を通して心通う・心育む交流プログラムの確立を目指して取り組んでいた。

こうして官民が一体となった観光地域づくりが動き始め、更なる発展を期待されていた矢先に、東日本大震災は起こった。

大地震が引き起こした津波により、町内に点在していた商店街はもとより、漁港周辺に集積していた水産加工場や観光施設、宿泊施設等の多くが被災した。また、当町の特徴として、事業者の多くが家族経営あるいは兼業型の商店であったため、店舗、自宅、工場等の全てを一度に失った事業者が多く、更には、幹線道路や鉄路等の交通網も寸断され、商工観光業の再建には計り知れない困難が予想された。



被災した魚竜館(歌津地区)



座学やフィールドワークを盛り込んだ「ふるさと観光講座」

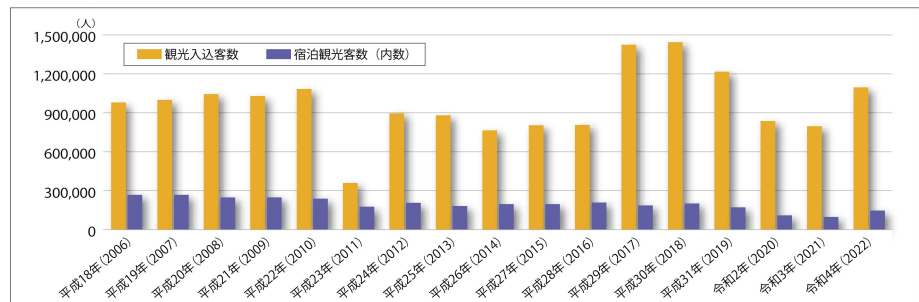


震災前のまちなか情報発信拠点・無料休憩所「汐風カフェ」



震災後のおさかな通り

■観光客入込数の推移



第3章 なりわいと賑わいのあるまちづくり

「福興市」～経済活動の流れを止めない

町内全域が甚大な被害を受け、絶望的とも言える状態であったが、震災から10日ほど過ぎた頃、「町の復興を後押しするような市を立ち上げたい」と町内の商工業者たちから声が上がった。「ぼうさい朝市ネットワーク」(※1)や全国からのたくさんの応援の声と、地域事業者の方々の思いに触れ、1日も早い商業活動の再開を後押しするため、町と観光協会でも可能な限りの後方支援を行い、開催に向けて動き始めた。

震災から49日後の平成23(2011)年4月29日に開催された「第1回南三陸福興市」では、全国の商店街ネットワークから送られてきた商品が所狭しと並べられ、テントの前には在りし日の商店街の店舗看板もずらりと並んだ。



記念すべき第1回目の開催は多くの町民が集まり、再会と安否確認の場にもなった



全国各地の商店街が応援に駆けつけてくれた福興市

(※1) ぼうさい朝市ネットワーク

全国各地の商店街をネットワーク化し、お互いが被災した際には助け合うという目的で作られた商店街の連携組織。震災前から各地の催事で特産品を販売し合う等の深いつながりを持っていた。

自宅もさることながら、店舗や工場すらも失った店主らの「それでも負けずに立ち上がる」という姿は、多くの方々の希望の光になったと同時に、福興市の開催は、震災により各地の避難所に散らばった町民同士にとっても知人の無事を確かめ合う、貴重な再会の場となった。

また、開催の数日前には、東北新幹線の全線開通や県内内陸部の震災による風評被害等を受け、村井宮城県知事がいち早く「観光復興宣言」を行い、まさに東北全体が復興に向け動き出した記念すべき日に、町の観光復興も福興市の開催を受け、その一歩を確実に踏み出した。

福興市は以後、ほぼ毎月最終日曜日に開催され、令和4(2022)年5月29日の第100回を迎えるまで、継続的に開催された。

福興市開催のもう一つの大きな効果は、地域情報の発信と新たな観光の受け入れ態勢の構築であった。

開催当初から、多くのメディアが駆けつけたこともあり、福興市の賑わいと共に町の被災状況も全国に向けて発信された。また、福興市の開催を通して、町外・県外からのお客様に震災後の悲惨な姿の南三陸だけではなく、本来のふるさとの魅力を伝えようと、震災前から「ふるさと



テントには日用雑貨などが多く並んだ



第2回の福興市には、全国から応援メッセージが寄せられた

案内人」として活動を行っていた町民有志の方々が、会場内で「語り部ブース」を設置し、語り始めたことが、その後の「東日本大震災・語り部による学びのプログラム」の開発に繋がった。

このような取り組みが全国に向け発信されることで、徐々に全国の自治体や団体、旅行会社、個人等から視察の問い合わせが相次ぐようになった。平成23年8月には、観光協会が旅行会社などと連携し本格的な受入れがスタートしたことにより、全国から震災学習の拠点として注目され、多くの団体等を誘致するようになった。

被災地の中でも被害が大きかった南三陸町が早くから地域住民主体でこれらの取り組みを展開したことが高く評価され、「平成23年度地域づくり総務大臣表彰」の大賞を受賞したことは、町全体にとって大きな励みとなった。

平成23年度
地域づくり総務
大臣表彰
大賞受賞

表彰式の様子



ベイスайдアリーナロビーでの語り部



まち歩き語り部で案内するガイド



南三陸福興市第100回記念開催の様子



長年にわたるイベント支援をいただいたNEC TOMONIプロジェクトから記念フラッグの贈呈



福興市の開催は多くの地域団体活動の再始動のきっかけにもなった



第1回からのチラシを展示。ゼロからのスタートだった福興市は、登米市観光物産協会等の多大な支援により町内の方々へ情報を届けることができた



念願の100回記念を笑顔で終えた福興市運営メンバーたち

1. 産業の再生・復興

5. 新たな商店街の創設と商工業の復興

- 平成23年度中に2つの仮設商店街がオープンした。
- 志津川・歌津両地区の商店街を軸に、地域外からの来訪者が多く訪れるようになった。
- 被災地視察と防災学習を組み合わせた「東日本大震災・語り部による学びのプログラム」が、他の被災地域に先駆けて全国展開された話題となった。
- 新市街地のグランドデザインを進め、先行して平成29年に本設の「南三陸さんさん商店街」、令和4年10月に北側エリアの施設整備が完了し、「道の駅さんさん南三陸」がグランドオープンを迎えた。

復興の拠点となった仮設商店街

復興市の開催を重ねていく中で商工事業者の店舗再建への思いは募った。従来の商店街の形にはとらわれず商業復興による地域経済活性の活動拠点が必要だという共通認識も生まれた。仮設商店街の整備に向けた動きが始まり、独立行政法人中小企業基盤整備機構の「仮設施設整備事業」を活用して平成23(2011)年12月13日に「伊里前福幸商店街」が、続いて平成24(2012)年2月25日には「南三陸さんさん商店街」がオープンした。

「南三陸さんさん商店街」の仮設施設整備に当たり、当初開催した説明会には108人の店主が集まった。その

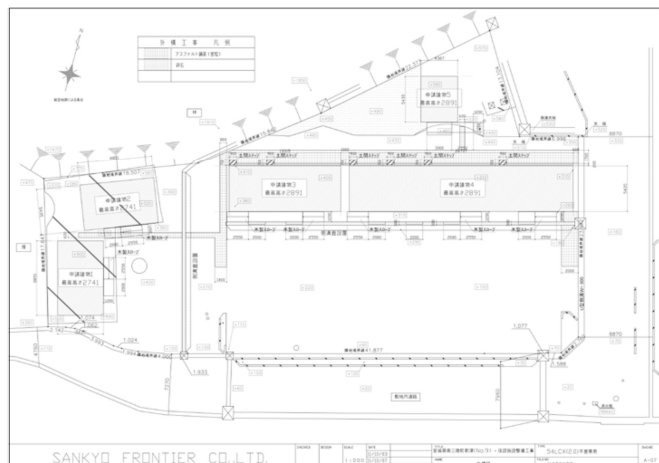
後、店舗の広さや設備、家賃等諸々の条件により参加事業者は絞り込まれ、最終的には29人の店主で平成23年10月に運営組合が結成された。

仮設商店街の設置は他の被災自治体の仮設商店街と比べて早い方ではなかったが、組合全体でより納得のいく商店街を作るため議論に十分な時間を要したためであり、その結果、仮設商店街で多く見られたような2階建て長屋形式ではなく、市街地全てが流失した町だからこそ、商店街という賑いの拠点に、テナント店舗（戸建て）形式を実現させ、そこに再び街並みを作りだしたのである。

また、復興過程における交流拠点の位置付けとして、観光協会の事務所やJR気仙沼線BRT志津川駅などの施設も併設された。



仮設商店街のシンボルとなったゲート

■伊里前商店街
平面図

志津川・歌津 両地区の仮設商店街



平成24年2月25日仮設商店街オープン



仮設商店街では朝市も名物でした。※現在は開催されておりません。



音楽イベントで盛り上がりを見せる歌津夏まつり



仮設商店街を会場に「伊里前しろうお祭り」

■仮設さんさん商店街
平面図

第3章 なりわいと賑わいのあるまちづくり

工商と観光の連携が集客の足掛かりに

復興市の開催をきっかけにスタートした「東日本大震災・語り部による学びのプログラム」は、なんらかの形で被災地の力になりたいという方々からも反響を得て、着実にその利用者数を伸ばしていた。更に、南三陸さん商店街が仮設オープンすると、震災前から取り組んでいたご当地名物丼「南三陸キラキラ丼」を再び提供する店舗も出始め、災害ボランティアの方々や復旧工事関係者、視察等の団体のみならず、買って応援! 食べて応援! の個人のお客様が多数訪れるようになった。

町と外を結ぶ一つの拠点が整備されたことは、復興期における工商観光の大きな起爆剤になったと言える。

この頃には、旅行会社等から「復興応援ツアー」の問合せも増え始め、観光協会が受け皿となって旅行商品の

造成を行った。中でもJR東日本が主催する南三陸・気仙沼復興応援号(びゅうバス)は、毎週末に開催され、平成24(2012)年から平成26(2014)年頃まではほぼ満席となる好評ぶりであった。

他の旅行会社でも語り部ガイドを盛り込んだ被災地への立ち寄りを含め、東北の主要観光地と組み合わせた「東北応援」ツアーが多数造成されるようになり、南三陸さん商店街はこのようなツアーでの立ち寄りスポットとして定着した。

平成26年には経済産業省の「がんばる商店街30選」にも選ばれるなど、被災地の顔となって地域の情報発信や交流拠点の役割を果たすようになった。

復興市に始まり両地区の仮設商店街開設にいたる工商観光業の再建の動きは、地域事業者が関係機関等と連携

を図りながら主体的に取り組んで来た。これらの地域の動きを軸に、町や産業団体は、更なる推進を図るべく、国や県などの補助制度活用による財源の確保や、関係機関と連携した誘致プロモーション、情報発信、体制整備の強化に努め、交流人口及び観光消費額の早期回復による地域再生に、官民が一体となって取り組んだ。

町のランドデザインと本設商店街

仮設商店街などの工商観光事業者が町内への来訪者を受け入れ、観光協会が来訪者のニーズに応えるプログラムや商品の開発を行う一方、町は被災跡地での新市街地整備の構想を進めた。災害危険区域となり居住不可となった低地部を「被災市街地復興推進地域」に指定し、土地区画整理事業を進めながら、町民や地権者、まちづくり協議会とともに、まちづくりの方向性を検討した。

議論をより実り多いものとするために、世界的に著名で宮城県とも関わり深い建築家の隈研吾氏に依頼して、こうした町民の議論の内容や各種意向調査の結果などを踏

まえた具体的なイメージをつくっていただき、「志津川市街地ランドデザイン」として、平成26年5月に町民に公開した。これはその後、「南三陸町第2次総合計画」「南三陸町志津川地区まちづくりマスタープラン」でさらに精度を上げていった。

「工商観光ゾーン」の目玉となる商業施設は、民間主体のまちづくり会社「株式会社南三陸まちづくり未来」が整備した。平成29(2017)年3月3日に「南三陸さん商店街」が、4月23日に「南三陸ハマーレ歌津商店街」がそれぞれ本設オープンした。

両商店街はいずれも、海を臨む国道45号沿いにオープンした。

「南三陸さん商店街」周辺は新しいまちづくり計画の中で、観光・交流エリアとして位置付けられており、オープンから5年後の令和4(2022)年10月には伝承施設、観光交流施設、JR気仙沼線BRT志津川駅などがそれぞれ整備され、先行オープンエリアを含んだ全体で道の駅登録を行い、「道の駅さん商店街」が誕生した。



びゅうバス「復興応援ツアー」パンフレット



「がんばる商店街30選」の授賞式



「がんばる商店街30選」の表彰状



飲食店を中心に回遊できる商店街として話題に



南三陸ハマーレ歌津商店街。歌津地区の本設商店街としてオープン。令和5年4月には隣接して「南三陸ハマーレ広場」がオープンした。



ハマーレ歌津商店街の皆さん Photo: 浅田政志「みんなで南三陸」より

4連ポスター「海とともに生きるまち南三陸」

復興途上時、被災イメージを払拭し町の魅力を感じてもらう目的で作成した観光ポスター



本設の南三陸さん商店街。飲食店や鮮魚店、お土産物店など町外からの観光客向けの店舗は商店街の内側に配し、電気店、理美容室など町民の利用頻度が高い店舗は駐車場に面するよう、外側に配されている。



さん商店街の皆さん Photo: 浅田政志「みんなで南三陸」より

第3章 なりわいと賑わいのあるまちづくり

南三陸さんさん商店街

平成29年3月 本設オープン(28事業者)

- 木造平屋建て6棟
- 飲食・生活関連・鮮魚・菓子・理美容・葬祭・コンビニ・産直
- 敷地20,112㎡、延床3,089㎡、海拔10.3m(盛土8.3m)
- オープンから1年間の観光交流拠点の入込客数約63万人



「道の駅さんさん南三陸」オープンセレモニー



観光交流施設「南三陸ポータルセンター」

平成24年2月 仮設オープン(36事業者)

- 志津川復興名店街(さんさん商店街)
- 平成24年2月～平成29年12月
- ※敷地6,200㎡・延床1,630㎡(1店舗あたり25～50㎡)



「道の駅さんさん南三陸」グランドオープンのポスター

南三陸ハマレ歌津

平成29年4月 本設オープン(8事業者)

- 木造平屋建て2棟
- 飲食・生活関連・菓子
- 敷地4,123㎡、延床782㎡、海拔7.05m(盛土5.3m)
- オープンから1年間の入込客数約35万人

平成23年12月 仮設オープン(11事業者)

- 伊里前福幸商店街 平成23年12月～平成29年5月
- 第Ⅰ期 平成23年12月～平成27年12月(8事業者)
- ※敷地1,730㎡・延床340㎡(1店舗あたり24～48㎡)
- 第Ⅱ期 平成27年12月～平成29年5月(10事業者)

南三陸ハマレ広場



南三陸ハマレ広場。滑り台や登り棒などが組み合わされた複合大型遊具と、巨大トランポリン型遊具「ふわふわドーム」が2基設置され、子どもたちに人気のスポットとなっている。



南三陸ハマレ広場オープニングセレモニー

道の駅「さんさん南三陸」グランドオープンに合わせ、多くのご支援をいただいた皆様に感謝と南三陸の希望をお伝えするため町が作成した「感謝広告」。

(令和4年9月30日 河北新報朝刊掲載)

この広告は、令和4年度第53回仙台広告賞において新聞部門「金賞」を受賞した。



1. 産業の再生・復興

6. 南三陸町ならではの観光の再構築

- 平成21年に法人化し第3種旅行業登録を行った観光協会は、行政や地域事業者と町外のニーズをつなぐ中間支援組織の役割を果たしている。
- 観光入込客数は平成30年には過去最高となる144万人を記録し、新型コロナウイルス感染症等の影響はありながらも、現在は概ね震災前の水準を超えて推移している。
- 「道の駅さんさん南三陸」の完成により、観光交流拠点整備が完了している。

中間支援組織として自立を目指す
南三陸町観光協会

南三陸町観光協会は平成21(2009)年に法人化、3年後の自立を目指して緊急雇用対策事業などを活用し、人材育成・自主事業収益の両面から組織の拡大を図っていたが、震災により事業継続が困難になり一時は解散も議論された。しかし、「復興市」が定期的に開催されたことや、これに伴い語り部を含む「語り部による学びのプログラム」への視察や取材、旅行会社等からの問い合わせが相次ぐようになったことで、法人設立当初の目的であった「観光の中間支援組織」としての役割を正に果たすようになった。そのため、再び緊急雇用対策事業を活用して組織強化を行い、煩雑化する問い合わせの受け皿として行政や地域事業者との繋ぎ役となって観光プログラム開発や商品開発に取り組んだ。

観光交流事業が、震災後の地域再生の起爆剤となるよ

う、自らの組織を維持・成長させるため、補助金に依存せず収益を確保する自立型の地域観光運営を目指し、「語り部による学びのプログラム」も直営事業の商品の一つとして当初から有償で催行した。

これにより、受け皿となる語り部や地域事業者に対しても、ボランティア協力ではなく、事業として持続的に受入れが可能となるよう、役割分担を明確化し「観光地域づくりプラットフォーム」の構築を図った。

地域の多大なる協力と理解を得ながら、このような事業を軸に積極的な活動を展開し、現在では町の観光地域づくりの核となっている。

震災前から、大型観光誘客キャンペーンの開催をきっかけに、町を挙げて地域資源を活かした南三陸町ならではの観光の形を模索し、官民や業種の垣根を超えて練り上げた構想が、結果的に震災によって加速され具現化したともいえる。

観光交流拠点「道の駅さんさん南三陸」の役割

平成24(2012)年から平成28(2016)年にかけて町の観光入込客数は震災前の8割程度まで回復した。南三陸さん商店街やハマール歌津商店街が本設となり、三陸沿岸道路が全線開通した平成29(2017)年には140万人を超え、その後も震災前を上回る数字を記録している。新型コロナウイルス感染症の流行で令和2(2020)年から一時落ち込みはしたものの、継続的な情報発信や誘致活動により、教

東日本大震災・語り部による
学びのプログラム

被災地の現状を伝える視察案内と語り部による体験談の講話を組み合わせた旅行商品として、観光協会と大手旅行会社が共同開発し、全国展開を行った。当初は行政機関の利用が多かったが、徐々に防災教育分野へ波及し、学校や企業の教育プログラムとして定着。令和4年にオープンした震災伝承館「南三陸311メモリアル」のプログラム開発にも、こうした取り組みの積み重ねが活かされた。

育旅行をはじめとする団体の受入れにより、徐々に回復の兆しが見えてきている。

令和4(2022)年には先行して営業を開始した南三陸さん商店街に加え、北側隣接地に南三陸311メモリアルや南三陸ポータルセンター、JR気仙沼線BRT志津川駅が開業し道の駅さんさん南三陸がグランドオープンを迎えた。

道の駅のコンセプトに「いのちを想う」、「旬を味わう」、「笑顔が行き交う」を掲げ、町の特色を活かし、誘客・地域周遊の拠点となることを目指している。

南三陸311メモリアルのメインコンテンツである「ラーニングプログラム」は、ただ単に映像を観賞するのではなく、長い時間をかけて記録し続けた町民の証言をもとに、提示された問いに対し、「もし、自分がそこにいたらどう考え、行動するか」を周りの方々と対話していただく時間を組み込んでいる。このことにより、津波の破壊力や自然災害の恐ろしさだけでなく、生き残った者のつらさや苦しみにも触れることで、災害を自分ごとに置き換えながら自ら

に問い続ける時間を持ち帰っていただくことをミッションとしている。また、館内には時間と記憶、そして一人一人の失われた人生に静かに思いを巡らせ、命の尊さ、重さに触れる小さなアート空間があり、五感で感じることができるとも特色の一つである。

このように、南三陸ならではの特色を活かした伝承と交流、そして交通の3つの機能を備えた道の駅さんさん南三陸は、町のゲートウェイとしての役割を果たしながら、町内各所へ周遊を促すハブ機能を備えた観光交流拠点となった。

三陸道の全線開通や道の駅の開業など、利便性の向上と共に仙台圏からの日帰り観光客が増加傾向である一方、令和4年時点で、宿泊客数は震災前の水準への回復には至っていないのが現状であるため、各種施設や地域資源をフルに活用した長期滞在型の交流事業を推進し全体の底上げに取り組んでいる。



ラーニングシアター

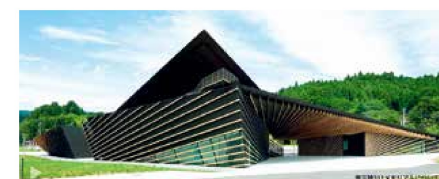
東日本大震災伝承館
「南三陸311メモリアル」
ラーニングプログラム

自分自身のこととして災害について学びあう「南三陸311メモリアル」のメインコンテンツ。住民の証言映像をご覧いただき「もし自分がそこにいたら、どう考え、行動するか」を対話を通じて考えるプログラムである。

展示ギャラリー



「ふるさと南三陸を学ぶ講座」でラーニングプログラムを体験する南三陸高校生



道の駅さんさん南三陸・南三陸311メモリアル

第3章 なりわいと賑わいのあるまちづくり

次世代に繋ぐ「南三陸ならではの観光交流」

震災前から積み上げてきた地域の小さな成功体験を通して芽生えた「観光地域づくり」という概念は、震災から観光復興の経験を経て、より強固な確信に変化してきたものとする。

一般的に観光交流事業の最大の効果は、交流人口による観光消費額の拡大を図り、地域経済を活性化することにあるが、南三陸町においては経済効果のみならず、地域や地域住民との出会いが将来的な移住への関心や関係人口の創出に繋がる効果も重視している。

一つの例として、震災により被災した南三陸病院の再建に、町では台湾の皆様から多大なご支援をいただいている。このご縁を途切れることなく次の世代に繋いでいくため、町と観光協会が連携し、台湾からの教育旅行の誘致に取り組んでいる。

この先、子どもたちと震災を振り返るとき、被害の甚大さ、自然災害の怖さを伝えることはもちろん大切ではあるが、この震災で芽生えた多くのご縁という、将来にわたり共に支え合える絆も残してくれたということを、観光交流事業を通して次の世代へ引き継いでいきたいと考えている。

そのため、一般家庭に宿泊する「民泊体験」や、地元のお母さん方と一緒に活動する「郷土料理体験」、または地元の高校や中学校、小学校、老人福祉施設での交流活動を行うなど、多くの地域の方々と関わりを持てるプログラムを提供し、双方にとって「良い出会いだった、関わり合うことが出来

て良かった」と思える交流を大切にしている。

震災からの復興の過程で、地域では海・山・里・まちそれぞれに素晴らしい取り組みが生まれている。また、これを取り巻く環境や持続可能な社会、そして教育分野においても、これまで以上に人々の関心が高まっていると言える。

これらの要素を盛り込みながら、これまで育んできた南三陸ならではの仕組み、強みを活かし、今後も「観光地域づくり」を更に推進していく計画である。

教育旅行をきっかけとした台湾との交流

台湾からの教育旅行は、町が新病院の建設に際し台湾紅十字会から多大な支援を受けたことをきっかけに始まった。台湾から訪れる生徒たちは、町内の高校生や中学生、小学生との交流や、郷土料理体験、民泊体験、志津川湾夏祭りへの参加、地域文化である「きりこ」体験とさまざまな機会を通して地域住民との交流を深めている。令和5(2023)年4月に志津川高校から生まれ変わった「南三陸高校」は、台湾・嘉義県立竹崎高級中学校と姉妹校となった。

さらに、大学生のインターンシップや中華民国工商協進会の視察研修を受け入れる等、経済面での絆も深まっている。

このような取り組みから、南三陸観光ポータルサイトには中国語(繁体字)専用ページが設けられ、ご支援をいただいた台湾の皆様には直接情報が伝わるよう整備している。



志津川湾夏まつりに参加した台湾高校生



台湾高校生の民泊体験



嘉義県立竹崎高級中学と南三陸高校の姉妹校締結式



中華民国工商協進会南三陸視察研修受入れ



台湾大学生によるインターンシップ受け入れ事業

「いのちめぐるまち」の観光地域づくりを目指して

町では、「ひと森里海 いのちめぐるまち 南三陸」を将来像として掲げ、自然と共生するまちづくりを進めている。観光分野においても、この将来像の実現に向け、町ならではの新しいスタイルの観光に取り組んでいる。

環境保全ビーチクリーン活動



南三陸町観光協会「SDGsへの取り組み」

東日本大震災で甚大な被害を受けたこの地域全体が体験のフィールドであり、ここに生きる暮らしの中にこそ、後世に伝えない「今」がある。SDGs(※1)に掲げられた目指すべきゴールは被災から立ち上がった南三陸町だからこそ意識すべき目標でもある。南三陸町観光協会では、地域資源を活かしたプログラムを提供し、子どもたちの学びの心を育み、持続可能な開発目標に寄与する取り組みを推進してきた。

(※1)SDGs(持続可能な開発目標)

SDGsとは、2015年9月に国連で採択され、世界が合意した「持続可能な開発目標」(Sustainable Development Goals)の略称です。全世界の共通課題である、気候変動や海、陸の環境保全、住み続けられるまちづくりについてなど様々な課題を2030年までに解決し「誰一人として取り残さない」世界の実現を目指すために17の目標を設定しています。

南三陸町観光協会の主なプログラム(数字はSDGsの17の目標の番号)

- エネルギーをみんなにそしてクリーンに：ターゲット7.2再生可能エネルギーの割合を拡大。
(例/南三陸BIO施設見学プログラム：2015年10月に資源・エネルギーの地域内循環を掲げ拠点としてバイオガス施設が開設。町内で排出される廃棄物を処理しバイオガスや液体肥料を生成する工場を見学するプログラム。)
- 住み続けられるまちづくりを：ターゲット11.5災害による被災者数を削減し経済損失を減らす。
(例/語り部による学びのプログラム：自身の被災経験をもとに防災、減災につなげる活動として語り部体験を提供している)
- つくる責任使う責任：ターゲット12.3食品ロスの減少、12.5廃棄物の再利用により廃棄物の発生を大幅に削減するなど。
(例/南三陸人に学ぶプログラム：上記目標に取り組み団体、企業社長が講師を務める)
- 海の豊かさを守ろう：ターゲット14.2持続的な管理と保護を行い健全で生産的な海洋を実現する。
(例/海から学ぶプログラム：当プログラムでは、日本初となるASC養殖認証を取得したカキ養殖業者もプログラム講師となり体験を受け入れている。)
- 陸の豊かさを守ろう：ターゲット 15.2森林の持続可能な経営の実施 15.4生物多様性を含む山生地生態系の保全。
(例/杉枝スプーン・フォークづくり：当プログラムではFSC森林管理認証を取得した山林の間伐材を使用し提供している)



サンオーレそではま海水浴場

震災前は年間5万人以上が訪れる県内屈指の海水浴場だったが、震災により周辺は70cm以上の地盤沈下に見舞われ、また大量の砂や消波ブロックなども流失し、砂浜一帯には大量のガレキなどが流れ着いた。

生活・住宅再建が最優先であったため、観光施設の復旧には月日を要したが、3万㎡を超える砂が運び込まれ、震災前の美しい景観を取り戻すように整備され、平成29(2017)年7月15日に再オープンを果たした。

隣接して整備された「荒島・楽天パーク」には、赤い羽根共同募金会の「被災地の子どもたちへ遊具を贈ろう!プロジェクト」やアサヒビール株式会社の「うまいを明日へ!プロジェクト」から遊具の寄贈を受け、株式会社楽天野球団からは「楽天こどもスタジアム」を設置いただくなど、多くの方々のご支援をいただきながら、子どもたちの笑顔溢れる臨海公園へと生まれ変わった。

また、サンオーレそではま海水浴場は、令和5年に国際環境認証「ブルーフラッグ」(※2)を取得した。ブルーフラッグの取得には「きれいな海」、「人にやさしい海」、「安心して楽しめる海」、「学びあえる海」の4つの項目で33の基準を満たす状態を維持していく必要がある。町は、地域の素晴らしい資源を次の世代に引き継ぐため、4つの項目の中でも特に地域にさまざまな恵みをもたらす「志津川湾」の環境を保全し、また学びあう取り組みとして環境教育や人材育成に力を入れている。

(※2)ブルーフラッグ

ブルーフラッグとは、国際NGO FEE(国際環境教育基金)が実施するビーチ・マリーナ・観光用ボートを対象とした世界で最も歴史ある国際認証制度。①水質、②環境教育と情報、③環境マネジメント、④安全性・サービスの4分野・33項目の認証基準を達成すると取得でき、毎年の審査を通じて、ビーチにおける持続可能な発展を目指している。



観光協会教育・研修専用サイト



みちのく潮風トレイルモデルコース



シーカヤック